

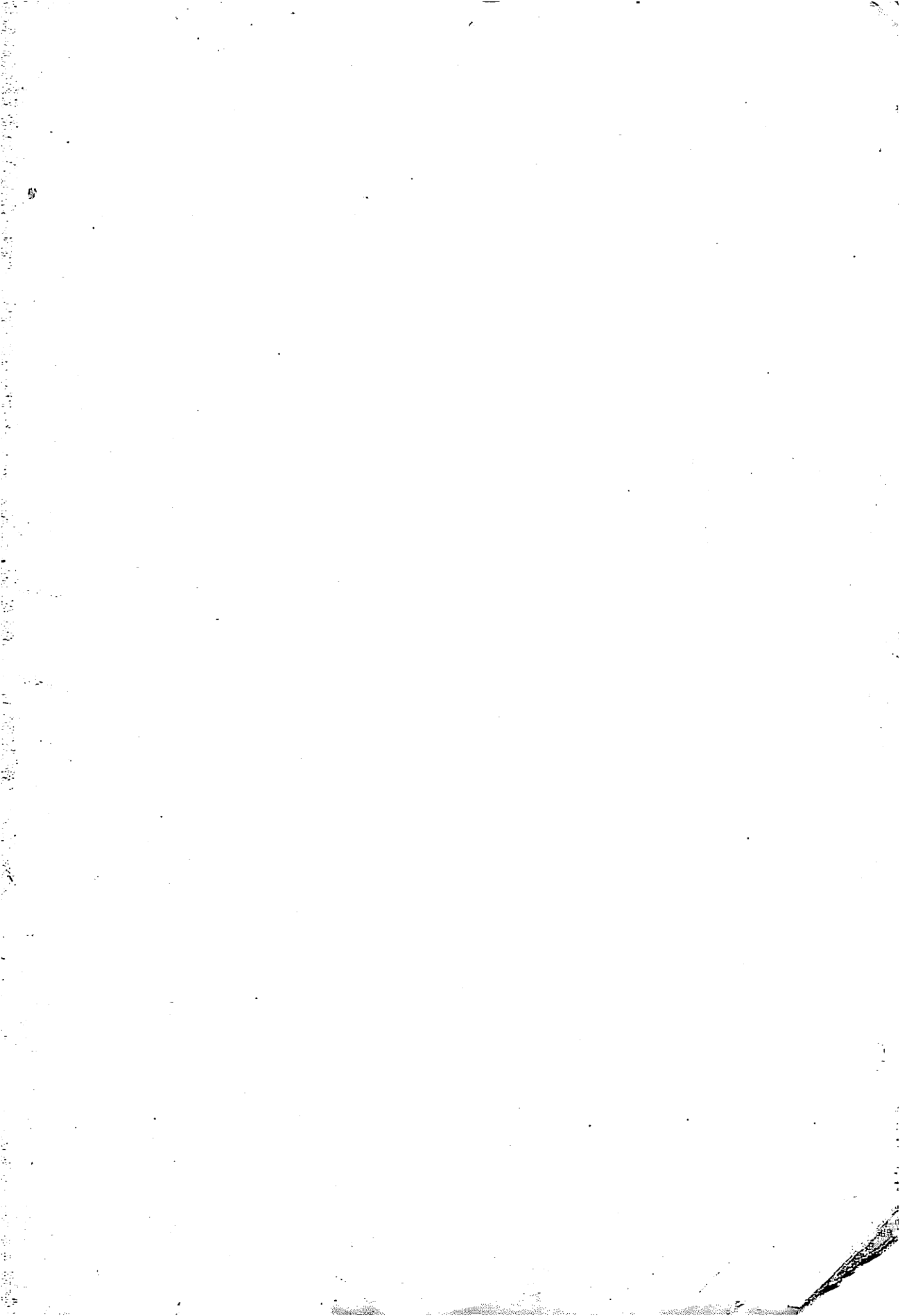
# ぶどうの木

— 第 1 号 —

## 目 次

巻 頭 言	榎本 收師
あなたはどこにいるのか	松村 直行 (1)
家の仏壇	松村 直行 (3)
与えられた道	丸橋 幸一 (7)
選ばれた私	大口 種義 (7)
短 歌	榎本 利三郎 (9) 松村 直行
我家の夏休み	Y . E (12)
祈りに答え給う主	正野 員子 (14)
私の祈り	菅野 カナエ (17)
子供のフィルム	伊規須 泰子 (18)
詩「夕暮に」	伊規須 泰子 (21)
久住登山の鬼い出	尼田 隆己 (21)
落才教師	正野 真宏 (25)

八幡前田教会



わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人につながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。

(ヨハネ 十五ノ五)

此の地に植えられた、小さいぶどうの株から芽が出て、父なる神様に育てられて二十五年、やつと茲まで成長しました。さきにサフラン会誌として小さい新しい芽を出しましたが、つゞいて教会誌として成長しました。どうかよき農夫である父なる神によつて多くの実が結ばれる様祈ります。

一本のぶどうの木にたらなる小枝として此の会誌を通してお互に悩みも、喜びも共に頌ち合いおいしい実を豊かに結び父なる神の喜びに与り度いものです。

「ぶどうの木」は教会の茶の間です。むつかしい事はさておいても、皆んながペンを執つて交りのうちに響り高い実を結ばせて頂き度く願つて居ります。

「あなたはどこにいるのか？」

松村直行

クリスマスの晩でした。ウットと眠つておると階段を登ってくる音がして牧師先生が顔を見せました。そしてすぐ表の窓を開けようとしています、先生は少し忙がしそうで嬉しそうで又多少興奮しておられる様でした。何事だろうと思つて開放された窓から身を乗り出して下を見おろすと、往來に二台の自動車がいり、大勢の教会の兄弟達が私に氣づいて笑いかけて来ました。

「ああ今日はクリスマス、感謝会に行けなかつた人達を慰問に廻つておられるのですね。」と私が尋ねると、「そうですね、未だあちこちと廻りますがどうです少し起きてみますか」と先生は言われましたので私はベットから上半身を起してみました。先生の合図で讃美歌の合唱が始まりました。大勢の合唱ですから遠くまで聞こえます、すると人達が何事かと、玄関を開けて表へ出て来ました。そして私を見上げ或いは周囲を

見廻して笑いながら近所同士で何事か話しあつています。「フーンあの家は耶蘇教だったのか」とでも話し合つておるのでしよう。私は大分照れました、恥かしくはないが何故か子供が悪戯をして見付けられた時の様な照れ臭い氣持が突然に湧いて来ました。何故こんな氣持がするのかわかりませんがとに角照れ臭い氣持がしたのです。けれどもすぐ思ひなおして私は手を振つて感謝の氣持を合図で送りました。二番目は私の好きな讃美歌と言われるので五一三番「天に宝積める者は、げにも幸あるかな」と歌つて頂きました合

唱が済んでもまだ大勢の近所の人は見えています。そして私の方を指さし或いは兄弟方を見廻して話し合つたりうなずいたり悪意の無い微笑を浮べて見えています。私はもう照れた事や氣恥かしい思を忘れて一心になつて皆さんに手を振りました。皆さんも盛んに手を振つておられます。先生も二階から手を振つておられたが「未だ廻らねばならぬからこれで」と言つて窓を閉ぢて下へ降りて行きました、やがてサヨナラという大勢の声がして自動車は何処かへ走り去り、近所の人達もそれぞれ家へ入つていきました。しばらくして私はベットの所で「今晚どうして自分は近所の人達に自分が

クリスチアンである事が知られた時照れて気恥かしく思つたのだろうか」と考えてみました「これは照れるなどとはいけないことだ。耶蘇教ならば何故照れるのか。年の若い人達に受ける宗教だろうが自分のような年寄りにはおかしいと云うのだろうか。ハイカラな宗教だとも自分は思つておるのかな。西洋から来た宗教だからハイカラなのか教会には年寄よりも若い人が多いから耶蘇教は若い人の宗教だとも人も思い世間も思い自分も思つているのか。クリスマスパーティばかり華やかに街中で大賑いしておるので派手な宗教とでも世間が思つておるので自分も其の中の一人と思われるから照れ臭いと思つたのか。在来の宗教は新興宗教でも既成宗教でも年寄のする事で若い人達はあまりやらないが、耶蘇教は大声で讚美歌を合唱するので女学生好みの宗教と思へて私は照れたのかな、案外私は気の小さな男だな」と思いました。全くの話が私がクリスチアンだと話すと相手の人はホーと云つた顔付をします。若い人達は気の若いおやじさんだなどでも云つた顔付をしますので、そんな時にはどうです私は少し変つてるでしょうと云いたい気持になるのですが今晚の様に多勢の近所の人達の前で讚美歌を合唱され

ては大分照れました。その気持は良くわかりませんでしたけれど。然しこれはいけない事だと思ひました。キリスト者だとの旗印をハッキリと打出さねばいけない。自分自身にも世間にもです。

法華教は 扇太鼓で打ち叩きながら旗印をハッキリ打出しておる天理教でも金光教でも教会員は旗織を蘇明にしておるのに私は妙に卑下してこつそりして来た。何と卑法な私だろう。これでは神様に申し訳の無い事だ。ドンツクドンツクとやつておるあの度胸だ。私も大声で讚美歌を歌つて「我はクリスチアンなり」と大声で旗織を蘇明にしなければいけないと思ひました。そのように腹が決まると今晚、近所の人達の前で大勢の教会員の人達が私はクリスチアンと皆で知らせて下さつて有難いことだつたと気付き神に感謝しました。今まで藤田宮のお守りだとか氏子の寄附だとか云つて来たのを全部断つて来ましたが近所には何故私が町内の寄附はしても神社の寄附をしないのかその理由を話さぬのでどう思つたかは知りませんが今晚の旗織の打出して私はクリスチアンだから神社の寄附はしないと云う事も之からハッキリと云える様になれたと思つてこれも感謝でした。

これで「松村は何者か。あれは耶蘇教だ」とハッキリさせられた事を神様に感謝します。今晚の出来事を通して自分が神様の前にも人の前にも身を隠していた事を示され私はこの点おわびを申し上げると共に今後どうか私を強くなしと力を与えて下さいませとお祈り申し上げます。

アーメン

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に救を得させる神の力がある。」  
(ローマ一〇十六)

## 家の仏壇

松村 直行

昭和二十八年十月、今から十二年前に福岡療養所から帰宅した時私は神様に忠誠を現す気持で家に在る神棚を全部焼き捨てることにしました。其の時いささかの不安も心の動揺もなく平然と行動しましたが唯焼く前に祈りました。

神様 私は神様に従いますので家に在るこれ等の偶像を焼き捨てます。もし是等の物が私に崇る事は全然

ないと思いますが、若しその様な時には天地の創造主であられる神様が私と私の家族の者を守つて下さいませ。と祈つて焼き捨てました。その後別に何の異状もなく私の体にも何等の異変もなく、反つて心はさつぱりとして非常な安心感と充実した力が与えられた氣持でした。ひと思いに仏壇も焼きたかつたのですが祖父のお骨が四十五年前から置いてあるし母のお骨も十八年前から置いてあるし他に祖父の位牌と親類の位牌も四枚ばかり仏壇の中にありますので、仏壇を焼くとお骨の置場が無くなり困りますので仏壇だけは氣にし乍ら其のまま置いていました。六年前にこのお骨だけを寺に預けそれ以来位牌だけの仏壇には供養もせずにおる内に父が三年前に八十三才で弟の家で亡くなりました。両親の忌日や命日には弟の処へ行つて供養に列席していましたが、私が病弱のため父の世話も出来ないで弟が長男の私に代つて父の世話から葬儀万端の一切まで又其の後の儀式も全部弟がやつてくれました。そうした儀式の度毎に列席していますが其の度に家に在る位牌が氣になつて来ます。

別に供養もせぬので或る日寺に位牌を始末してくれぬかと交渉に行きましたが、寺では預らぬと云いますし

それならお寺の手で焼くとか何とか始末してくれと話  
しましたが、私の話が不調法なのでしよう、反つて忌  
日命日には弟が儀式をやりますので、お盆とお彼岸に  
だけ供養に来てもらうと云う、全く私の氣持とは反対  
の交渉に終つてしまいました。そして私自身はクリス  
チアンだから仏壇には参らぬが先祖は尊ばねばならぬ  
から、お前達は仏壇を拜じなさいと、娘達に線香まで  
買つてやる結果になりました。サテお位牌の処置は全  
く困り抜きました。

仏壇に位牌があればどうしても二神に供える事になる  
し、と云つて今更こうなつては仏壇を焼く氣持はあつ  
ても実行する氣にはならずこの事で多少ノイローゼに  
なつていましたが思いあまつて或る時はキリスト者と  
公習しており乍ら家には仏壇があつて坊さんに盆やお  
彼岸には回向に來させたり位牌の足が折れておるのを  
修繕したりしておる私を弟は、私の息子に、お前のオ  
ヤジは馬鹿ばい。と罵られ息子は腹を立てて弟と喧嘩  
したり私自身も非常に不愉快に思つたりして、それで  
ハツト氣が付いて位牌を処置しようと思つても未だぐ  
ずぐずしていた私ですが、或る日思い余つて牧師に相  
談しました。

静かに聞いていた牧師は焼きなさいと云います。そし  
て懇々と天の神様以外には神も仏もまして偶像などあ  
つてはいけない。今は全く悔い改めて神様に仕えるこ  
とです。生活態度の切替えが何よりも大切です。

「主を恐れる道は清らかで永遠に絶えることがなく主  
のさばきは真実であつてことごとく正しい」(詩19の9)  
と懇らに教へられました。私は非常に感激しました。

「だれが自分のあやまちを知ることが出来ませうか。  
どうか、私の隠れたとがから解き放つて下さい。また

あなたの下僕を引き止めて故意の罪を犯させず、これ  
に支配されることのない様にして下さい」(詩19の12)

この御言葉を以つて祈りました。しかし彼等は私を指  
さして云うかも知れません。

「彼は主に身をゆだねた。主に彼を助けさせよ主は彼  
を喜ばれる故、主に、彼を救わせよ」(詩22の8)と云  
うでしよう。ですから神様私を助けて下さい。こんな  
に云われると思ひますどうか私を助けて下さい。

「わたしは我が魂を御手にゆだねます。主、まことの神  
よ、あなたはわたしをあがなわれました。あなたは空  
しい偶像に心を寄せる者を憎まれます。然し私は主に  
信頼し、あなたのいつくしみを喜び樂しみます。あな

たが私の苦しみをかえりみ、私の悩みに御心をとめ、私を敵の手に渡さず、わたしの足を広い所にたたせられたからです」(詩31の5、8)

これ等の御言葉を後でよみました、ああ私はほんとに悪るかつた。口先だけの信仰でキリスト者と云つており乍ら私の日常の生活態度は、小さな処には気を配らばつて形だけのキリスト者でおさまり教会には取り済ました謹ましい顔をしてアーメン、アーメンと云つておるが肝心の一番大きな全てを神様に捧げることが忘れていた。何と云う大失態であることか。

神様はどうか私のこの大きな罪を許して下さい。心から悪るかつたと悔い改めあやまりました。昔モーゼが山から十戒の石を持つて帰つてみれば人民は金の牛を造つて礼拝しておるのを見て非常に怒つた。

今神様に怒られては私は全くどうする事も出来ません。どうか私の大それた罪を許して下さいと、牧師の前で泣いて詫言しました。

牧師も取りなしの祈りをして下さいまして、私は泣いた顔で全くホツトして今度は心の底からこみ上げてくる喜びと嬉しさに一杯でした。この喜びは何とも云い様のない清々しい全く嬉しい歓喜に満ち愉悅にされた

喜びでした。又この喜びは今まで味わつたどの喜びよりもホツとした最も大きな実のある喜びでした。こんなわけで私も非常に心強く思つて翌日すぐ仏壇を焼きました。この事をつくづく考えて見ますと私達の心の中には日本伝来の染み着いた神仏教の因習と云う物が根強くこびり着いておる事を悟りました。

神棚や仏壇は何か悪い物、小供の頃より幽霊の話や映画を見て来て居るので粗末にすると罰が当りそうな気がする、と云つても別にお参りすることもせず(もつとも神仏に毎朝毎晩お勤めをする小教の日本人はおります)大切にもしないが粗末にも扱われない。5  
まあそうつと大事にしておく程度で、正月や何か祭りの時には大騒ぎしてお祭り行事をやるが其の時だけ、後は忘れて何もせぬと云つた程度のもの、それでいて何か恐いものだから何かの時には折れば厄払いもしてくる物と云つた感情が骨の髄まで込み込んでいます。それで神棚や仏壇にはどうしても手を付け兼ねますが牧師から神とパール像に仕える二心の信仰はいけないと教えられると、このことはわかっているのに実行出来なかつた私の優柔不断の信仰を知らされて信仰に依る生活態度の切替を今ハッキリと確立しておかねば、



入院した後では何も出来ない。終生後悔するぞと、思うと翌日早速火鉢で位牌を焼き仏壇は叩きこわして娘に手伝わせて焼いてしまいました。この時思いましたが生生活態度の切替えと云うことは説教には何度も聞かされ頭では理解出来ているが、実際には仲々出来辛いことです。その内には何とかしよう。これはこの位の程度で良からうと自分の都合の良い方に解釈して自分の都合の良い方に何とか都合を付けている。

之では何時まで経つても生活態度の切替は出来ない。これ位の事は良いだろうと思つていたことが案外神様に取つては大外れた事をしていたと後で氣の付くことがままありますがその時も其の内に改めよう其の内に改めようとそのままにして置くことが多かつたと思ひます。生活態度の切替えは氣が付いたら今日唯今早速実行することです。現に私が位牌の事は随分前から氣が付いてい乍ら其の内其の内で何時か人を当にして他人に嫌な事をやらせようとする。横着な心にまで発展します。位牌を焼いた後の何と清々としたサツパリとした氣持だつた事でしよう。不安どころか今迄に信じて神様は私を愛して下さいのだとの嬉しさがハッキリとしました。自分が悪るかつ

たと氣が付いが速座にお詫びの祈をして悔改め、悔ひ改めるだけでなく実行した事の嬉しさに伴う、この平安さ。すぐ其の場で神様は平安を与えて下さいました。この平安は金や物質で与えられはしない。靈ですからね。この平安を与えられた精神はもう何者と云えども動かす事の出来ない平安で、何者でもない。唯神様に従つたと云う忠誠心に与えられた平安は私だけのもの、又行方人にのみ神様が与えられる平安です。この平安の与えられた喜びは未だ充分に書き現す事が下手で出来ませんが仲々の物です。

案外こうした事は皆様の中にあるかも知れませんが私はこの様に平安を与えられ神様一辺倒で進む事の出来た事を心から感謝しています。どうか皆様の中に私の様な方がおられたら早速実行してみして下さいほんとなに愉しく嬉しくなります。

私の生活態度の切替えの「一コマ」初筆として書いてみました。

アーメン

三月十七日

(市立病院のベットにて)

与えられた道

丸橋幸市

私は以前から信心しておりながらも、いやな事やつらい事腹の立つ様な事、心配事などいろいろとおもしろくない事が次から次に、殆ど毎日の様にやつて来るので其の度毎にお祈りして居りますが、或る時こんな事がございました。私は毎日電車で昭和町から陣山までの卅二三分お祈りしながら通つて居ります。腰をかけてお祈りするのはとても良いのですが、つり皮にかまつてお祈りするのはどうも都合が悪くお祈りが出来ないので困つて居りました。丁度その朝も吊り皮を持つてどこか座席の空いた所はないかと思廻して居ましたらこんな事が与えられました。此れは道だなあと思付かして頂きました。此れも神様が私にあたえられた道だとわかると何だか重荷を下ろした様に楽に成り、空いた座席を探す気持もなくなり早速お祈をさせて頂きました。それからと云うものは今迄の様ないやな事、つらい事、腹の立つ事、心配な事、等がやつて来ても、

此れも与えられた道だなあと思付き、神様はこんなところも歩かして下さるのだなと思えば其の途端に悩み事一切が消えて無くなるのですから、こんな嬉しい事は有りません。

神はわれらの避所また力である。

(詩六十四ノ一)

選ばれた私

大口種義

「あなたがたはこの世ではなやみがある。しかし勇氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」

(ヨハネ一六・三三)

一年の計は元旦にありと言いますが、私にとつて新年聖会の御言はただに今年だけでなく、生涯の慰めと励ましであり、また希望の言であります。

神様も知らず、まして貴いエス様の十字架のあがないも知らずに自分の考えと努力で生きてゆけるとのみ思つて過して来た二五才の私を神様は誕生日昭和二年三月二五日に具体的に選んで下さつたと思ひます。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」(ヨハネ一五・一六) この世で弱く愚かなそして無きに等しい者をあえて選んで下さいました。イエス様が放とう息子のたとえでお教えになりましたように、その放とう息子はそのまま私の姿でした。神様から与えられました健康とまた手先のわずかな器用さを感謝することもなく、かえつてそれを誇り高ぶつた生活でした。

私は戦後の食糧難と製鉄所の厚延作業の危険から逃れて片田舎で自作農に従事するかたわら木材伐さいをしておりましたが、それは丁度私の誕生日の出来事でした。同僚の切り倒した木が頭に当つてぶつ倒れました。その後数十日間意識不明の後、生命は取り止めたものの両眼とも失明というこのようになにか盲になるうとは考えてみないことでした。

放とう息子のたとえのとおり生きる力も希望も失いました。けれども「主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし。わたしたちを打たれたがまた包んで下さるからだ。」(ホセア六・一) また「主は善にして善を行われます」(詩百十九ノ六十八) 私はこの出来事に会つて初めて神様を知りました。神様は最善の方法

をもつて私を御国の民の中に導いて下さいました。

「五体の一部を失つても、全身が地獄に投げ入れられない方が」(マタイ五・二十九) 私にとつてすばらしいことでした。

神様は現実の出来事を通しあるいは苦しいカリエスのベットのの中から点字奉仕をされる少女を通し、また多忙な務めのかたわらただ私のみのために点字の講習を受けられた先輩等を通して鈍いかたくな私の心を開いてまことの神を知らしめて下さいました。常に限りない御愛とあわれみをもつて貴い使命を与えて生かし、常に守り助けて御支配して下さいることを骨のずいまで知らされました。

「まず神の国と神の義とを求めよ。」(マタイ六・三十三) 大野さんがこの御言を書いて下さいましたので私は室の正面に掛けていつも心にとめております。御言のごとく、そうすれば食べるもの着るものは勿論必要なものは望む先から豊かに与えられると思ひます。何の働きもできず乞食するより他なかつた私のような者も豊かに豊かに恵まれた日々を過ごさせていだいております。

大野さんは「神様との交わりの時お祈りをする時に維

音が入つてこないから耳が聞えないことが感謝です。と言われます。私も今は同じことが言えるようになりました。

このような者も生かされ貴い使命が与えられていることを思います時、私の悩みは悩みではなくなり、今はただ感謝と讃美をもつて神に仕え勝利の道を歩みたいと願う者であります。

☆ 旧稿から ☆

短歌



榎 本 利 三 郎

(学校からの帰途峠道にて詠める)

○病みたもう 師を思いつゝ 折るかな

到津の山に 秋はふけゆく。

○チチと啼く 小鳥の声に 秋ふけぬ

余りに静かな 峠路かも。

○登りかねつ この坂道に 今日も亦

祈りて歩まん 秋更けき日。

○山拓く人の腰すえ 煙草喫む

峠路のなつかしくもある。

○青葉の頃 博多の海に たゞずめば

はるかに かすむ 海の中道

○ふるさとの山恋しくも思うかな

青葉の時は過ぎて行くらし。

○え渡る さつきの空にひるがえる

五月のぼりのなつかしくもある。

○メーデーにドンタクさわぎおもしろき

博多の町は不思議な町

○ふるさとを離れて遙か筑紫路に

さまよう心 淋しくもある。

○これよりは強く立たなん人のため

国のためにも生命も捨てゝ。

○ころころと、ころがる子等の愛らしさ

芦屋に過す春の一日。

○余りにも 淋しき心 春の日に

子等とたわむれ 今日を送りぬ

(一九三一)

○わが生命 献げしものと知りつゝも

いつしか守る 小さき己を

○おゝ神の 聖前に立つ日 来りなば

いさみて昇らん 天つ我が家に

○おゝ神の 聖旨ならでは 雀すら

他には落ちざる 天の下かも

○身の程を 知らぬ鳥と知りつゝも

止むに 止まれぬ 神のめぐみに

次の歌は「加藤のおばあちゃん」から頂いた手紙に  
機にふれて詠まれて居たのを、そのままにしてしま  
うのは惜しくて今日まで取つておいたものです。御本人  
の御許も得ないで申訳ありませんが、味わい深く私共  
にも親近感を与えられます。

聖書の中の赤像に

心ひかれてまたも開く

心泣きつゝ光もとめて

救われて三十幾年 母教会の礼拝に

出て詠める

山なす浪も何のその

我は主のため進み行かなん

明石の海岸浪あらく

我が主のためならば死なば死ね

春来とも美しき花見れど

我が心は暗き谷間を見る如し

別れにし月日はまたもめぐり来ぬ

昨日とのみぞ袖ぬるしかな

小夜更けて眠られぬまゝひもとくは

聖き齋なり 有難き齋

長き夜を眠らず何を想うらん

神にわびつゝ我は祈れり

淋しきは夜中に目酔め君想う

戸畑のあの日あの頃のこと

(三八年四月)

来年は七十のよわいを迎うる我にして

この足りなさを如何でつぐなわん

朝毎に神のみ聖業をたゝえつゝ

この美しき 石庭を見るかな

銅主の元に掃りし小羊の

今日うれしくも聖堂仰がん

銅主とあがめし師なりみ傍近く葬らば

君のよろこび如何にあるらん

君の笑顔 今日あかるくも浮ぶなり

君と献げし教会建ちぬ

師の恩を忘れじと植えしこの榎木

一人仰ぐと誰か思ひし

慕いまつりし銅主のもとに掃り行き

安けくませ小羊君は

夕映に來りて行きたき西の國

君がみ盞の眠る師のもと

小芝町の君と献げし教会に

はれがましくも秋陽匂はん

松村直行

夜半めさめ我主に愛されると、思うとき

浮びし歌を メモに記しおく

夜半めさめ うつつに主の愛 思うとき

雨だれの音も やわらかに聞こゆ

主を讃う歌を練るとき雨垂れの

音も止絶えし 夜半の二時半

ベッドにて コーヒー沸す 真夜中よ

音ばしきかおり 独り味わう。

音ばしき かおり独り味わわで

家族すべてに めぐみたまえや

知らざりき 証なす身のうれしさの

かほどまでつづくものとは

主の栄え 終りの日まで 幾十度  
教限りなく 証しつづけん

旧約に 読めど モーセの十戒を  
くり返しみて 現世の思いす

我が胸に 蛙銅うかや 一二匹

ラジオ聞く耳に ラッセル高し

胸ぐるし 痰壅がりて ぜい音す

出尽までは 今日もねられず

いそしまん 主のみ栄えを たたえばや

終りの日まで 日毎夜毎に

主を讃え 終りの日まで めぐまれん

よろこび歌いて 清く死に度し

励ましと 祈りに由りて 我支えらる

今日も祈りおらめ 遠方近方の友

(三五・一・一七)

## わが家の夏休み



Y  
.  
E

アルバイトして整えた、チロルハットから登山靴までひとかどの登山家の格恰して、「行つて参ります」と多くの知人や友達に見送られて、重いリュックを軽々と担いで富士登山に出かける迄にたくましく成長した長男の姿を見て言い現せない感謝で心が一パイに成るのです。

中学生の弟より一足早く夏休みになつた大学生の長男は、今月はじめから夏休みになつて兄の来るのを首を長くして西宮の下宿で待つている大学生の弟と一緒になつて、郷里で孫の成育を唯一の楽しみに余生を送つて居る祖母を、久しぶりで訪ねて程近い富士山へ登り五湖巡りをしようとの計画です。懐中には二人の旅費一切と、リュックには必需品の他に些やか乍ら祖母への心こめたプレゼント、親戚への贈物も詰合わされて居ります。

明るい夏休みを迎えて十二年前のわが家の夏休みは

私どもにも、子供達にも忘れられないものと成りました。長男が小学校五年次男が四年生、三男がその年の三月に生れ、五月には次男が紅熱で心配をし、三男は母乳が無くて人工栄養で当時インフレの余波を受けて、少い収入で日々の生活が精一パイでありました。七月廿日になつて、いよいよ夏休み。「〇さんは海へ行く、×さんは山へ行く、△さんは田舎え行くつて・・・」と友達の夏休みの計画を聞いて来ては語る子供達でありました。

ジリジリと油汗がにじみ出る様な暑い此の工場町の、しかも風通しの悪い家で、一夏を過させるのは全りに可愛そうでありました。浜辺で夏は涼しい郷里では子供を連れて私の帰るのを母は待つて居りました。然し旅費として費えるお金は一文も有りませんでした。せめて日帰りでも街を離れて海辺に連れて行き、あの広々とした海原を渡るきれいな空気を腹一パイ吸わせ度いのが親の切ない願でありました。

「此の夏休みには海水浴え連れて行つて上げるよ」と、此の一言は子供達をどんなに喜ばせたかわかりません。寝首にまで「海だ海だ」と言いつづけて居ました。然し毎晩子供達が寝静まるのを待つて主人と一緒

に子供の夢を叶えてやつて頂き度いと祈つては色々計画を胸るのでありました。

近くの泳げそうな海え日帰りで行くには〇〇円かかる。福間まで行けば汽車賃が××円。同じ汽車賃を出すなら一足伸ばして福岡の従妹の家に泊つて近くの百道の海水浴へ行けば一週間程居れる。けれどもそれは土産にいくらお八つに幾らと財布を前に計算をする。あれにすれば費用はかさんで割合効果が無い。此れにすれば後の生活費が底をつく。今から見れば僅かな費用であつたが出せないで苦心惨澹したものでありました。とうとう福岡の従妹の所へ泊る事にして寝たのは午前二時でありました。

翌日は子供達も揃つて出かけました。やつと苦心の末、海で一週間を過し満足して帰つたのでありました。数年後次男が中学二年のある日

「僕は夏休みが来ると思い出す事が一つある。小学校四年の夏休み、いよいよ明日は海へ行けると嬉しくて眠れなかつた。蚊帳の外では財布を前にお父さん、お母さんがお祈りしてはあれにしよう。もう止めよう。こうしよう・・・とおそくまで相談して居つたので僕も明日行けるだろうかとヒヤヒヤして居つた」と語つ



たのを忘れる事が出来ません。今はその次男が兄と一緒に何の心配もなく此の夏休みを一足一足に感謝をこめて富士を踏みしめて登っている事があるうと思つて感謝で胸が一パイであります。

一九六三年七月

N・H・Kラヂオ放送原稿より

### 「祈りに答え給う主」

(我が仕うる万軍の神エホバは活く)

(列上十七の一)

正野員子

いつも同じ時刻にきちんと帰つてくる暢之が今晚はどうしたのか帰らない。先に家拜をしてしまつたがまだ帰えない。仕方がないので見たくもないテレビで時間をつぶしたがそれでも帰えつて来ない。

「こんなにおそくまで一体何をしているのだろう」少々いらいらしてくる。享楽のためでないことは、私が一番よく知つている。でなければ一寸した事故か、さもなくばグリーン隊にでも取まかれていたのではないかろうか思つただけでもゾツとする。動悸が高鳴る。不安は倍加し、雪だるま式にふくれ上る。「おばかさん

だね。心配したとて何になる」「祈れば安し、獅子の穴にも」(讃美歌三一八番)「そうだそうだそうだつた」自問自答し「イエス様助けて下さい。もう十二時になるのに帰えりません。帰りたくても帰えられない何かがありましたら、それを取除いて今帰えして下さい。い一心中必死で祈つていると「主はあなたを守つて、すべての災を免れさせ又あなたの命を守られる(詩一二一の七)大丈夫心配することはない」今までの不安はすつ飛んで、やすらぎは私をおもつて満たされた。私は安心してやすむことが出来た。間もなく階段を駆け上るけたたましい音！暢ちやんだ！私の部屋の戸をガラリと明けたが、ねていたので一寸当惑した恰好「おそかつたね」いたわる気持で言つた。「課長がどうしても帰してくれんで困つたあ。どんなに頼んでも聞いてくれんし、母が心配しますから帰えして下さい何度も何度もたのんでやつと帰えつてきた」悲痛な声で言つた。さぞ疲れたであろうと思ひ「今晚もうおそいから早くおやすみ」くわしいことは明日聞くことにした。この時私は思つた。もしも主のみちびきがなかつたならば、状況は変つていたに違いない。修羅場とならぬにしても、お互い自分だけの勝手な主張をする

だろう。

「人が心配しているのに夜ふけまで、どこをうろついているのね」こんなことを言うたとしたら受け言葉に買言葉「だれも起きて待つとくれと言つた覚えはない。勝手に心配しとつて」あとは大変なことになるであろう。争いの絶えない家庭に、これに似たやり取りを耳にした事がある。福音に接した者の有難さ。自分のことばかりでなく他人のことを考えるようになるから不思議なものである。そして翌日私の顔を見るなり昨日の続きを語りだした。「ゆうべね課長が「酒のめ！」「僕飲めません」「そんな言いわけ通らん。のめと言つたらのめ！飲むまでは絶対帰えることならん。大体真面目一方で純情すぎる。一つ悪を入れてやるんだ」僕どうしてよいかわからず、逃れる事ばかり考えて「僕明日早番ですから帰えして下さい」「早番が何だそんなこというても駄目だ」聞いている私の方が腹が立つ。「いらん世話やく人もいるんやね。上役？いくつぐらい？」私は矢次早に尋ねた。「おぢさんよ。僕、年のことさつぱりわからんけど四十くらいかな？Aさんという課長で僕のこと思つて長い説教やつた」「酒呑めという説教？」そんな奴、にらみ返してやりたい

と思つた。

「いいや。そうやない。人が油売つている時も僕は働くので、まじめな者が上にあがるものでない。ポヤボヤしていると後輩のT君に先を越されいつまでたつてもパントリ（皿洗い）におらんならんぞT君の母親がチーフに取入つてご気嫌伺いに來とるのがわからんか。あんたの親は息子のことを考えたことないのかつて」私はチーフの顔さえ見たことがない。入社の時でさえ一人で行かせた。然し息子の将来は母親として人並に心配もし祈つて來た然し、そんなことまでして出世を望んだことはない。聞けば社内はすべてチーフの命令で動いており最高の権威者で、この人に憎まれてやめた者が何人かおるそうだ。それは後輩であろうが若者であろうが、自分の好みによつて抜てきするので先輩は居づらくなるのだそうだ。僕もその組になりそうだと言うのである。課長さんが見かねて忠告したのである。そのご厚意は深く感謝したい。然しこんなことがあつてよいものだろうか。成人式を終えて間もない息子に、大人のきたない社会悪を見せつけることは私には耐えられない。

道理が通らぬ世であるなら、世のならわしに従うべきか？ 潔べきな考えで、もしも息子が取残されたら、どうなる失 膳はおろかみじめさに耐えられなくなつてやめるかも知れない。いけない。いけない。私は神の子ではないか。世の人と違ひのだ。・・・それでは息子はどうなる二つのもの間にさまようことの如何に苦しい事ぞ、堂々めぐりするだけである。

「主をあがめる者は神に祈る」

主よ。私は疲れはてました。どうしたらよいでせうか。不安の胸のまゝ主に投げかけて祈つた。暗やみの中にも光があつた。

「玉の心は主の手のうちにあつて水の流れのようだ。

主はみ心のまゝにこれを導びかれる。」(箴二一・一)  
主よ有難うございます。すべてのものの上にある主よ。玉の心でさえ生かすも殺すも自由自在になさることの出来る方でした。チーフがなんだ人ではないか。如何に権威あろうと主はその思いおも変えることが出来ることがわかりました。主よチーフの心を真つ直ぐに息子に向けさせて下さい。正直者が馬鹿を見ることのないように守つて下さい。祈るうちほんとにその通りになるように思えてうれしくなつた。私は心定まりまし

た。もう動かされることはありません。

すべての道で主を認めよ。そうすればあなたの道をまつすぐにされる(箴三の六)

私は暢ちやんにこのことをはつきりさせて置かねばならぬと考えた。主は生きていらつしやる。チーフの心を変えることの出来る主に祈ろう。

人の言ばを恐れてはならないことを話した。「暢ちやん入社祝に上げたみことば覚えとるね」

「うん、わたしは常に主を前に置く、

主が右にいます故動かされることがない(詩一六の八)」

「その通り。今日までよく守つて来たとお母さんは思う。陰日向なく働き。朝六時出勤に間に合うように神様起して下さいと祈つたね。そして今日まで誰れの手も煩わしたことはなかつたね。主を前に置いているから出来ることとお母さんはほんとにうれしい。人が何と言つたつて今のまゝでいゝのよ。私たちの祈りはきつと聞かれるる」私は導びかれるまゝ説いた。フランスのコックローレンスがいつも主を前におく練習を十年二十年三十年続けている内顔が輝き出して遠国から牧師までが面会を求めようになり遂に王の料理頭になつた話もした。長時間になつたが、身動き一つせず

よく聞いてくれた。以来このことのために心を用いた。朝仕事の切をつけると一人部屋に入つて箴言廿一のみことばを握つて祈つた。たとえ一年かかつても祈り続けようと心にきめた。

それから一週間もたぬ或日の朝のことである。呼出しの電話がかゝつた。受話器を取ると、暢之の声が飛び込んできた。

「もしもしお母さん？」

「のぶちゃんね、どうしたの？」

「あのね僕今朝チーフと呼ばれてね。今日からグリル（調理）に行つていゝ指令が下つたよ。よろこんで」

「ほんと。よかつたね」

「僕昇給もしたんよ」

「ほんとう。まあよかつたね」

「うん。僕ね一分でも早うお母さんに知らせたかつたあ」私は胸が一杯で声が出なかつた。

「それからねお母さん。返事がないね」

「はい。ちゃんと聞いているよ」

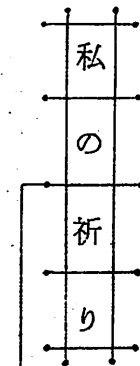
「あのね。神様にすぐ感謝してよ。ね」

「そうよ。何はおいてもするよ。あんたもね」

「よかつたね。よかつたね」

うれしさが込み上げて、何を言つてよいかわからず、よかつたねよかつたねの連続のまま電話を切つた。その足で二階に駆け上つて感謝の祈りを捧げた。主の實在をひしひしと感じつゝ、

昭和四〇年三月廿八日記



菅野 カナエ

教会誌をお集めになつておられることを聞き、私ごとき者でも加えさせていただけそうな気がして書いてみました。

「天のお父さま有難う感謝致します。昨夜はよく眠らせていただきまして有難うございます。（私は不眠症で苦しんでいたのです）目も見えます。耳も聞えます。手も足も動きます。体全体を動かすことができずから感謝します。どうか今日一日も元気で働く喜びをお与え下さい。ケガ禍いのないようお守り下さいませ。両親、主人そして子供四人の家族をお守り下さいませ。イエスキリストの御名を通し感謝して乞ひ願ひ奉ります。アーメン」朝の祈りを終えてこの記事を記します。

私は今から十五年程前、家族の病氣のことを氣に病んで頭の重い毎日を送つておりました。その頃近くの小鷺田社宅におられた海江田さんからある時「今晚家でキリスト教の集會があるからぜひいらつしやい」と誘われましたので、行つてみました。そしてそこで神様は愛なる方、私達の悩みを解決して下さい方であるというお話しを伺い、私は真暗な中に望みが与えられた思いがしました。それから続けて集會に出させてもらい偉大な神様を少しづつ悟らせていただきました。

今日では、朝な夕なに神様への信頼を新にしながら毎日を喜こんで過ごさせていただけますことをこの上なき幸福と感謝でいつばいです。今、私が心より祈るのは家族の救いのであります。このまゝですと私がこの世を去つた後は南無阿弥陀仏で弔いされそうです。信仰も浅く弱い私です。どうか皆さんの祈りの中にこのことを加えて下さいますようお願い致します。

## 子供のフィルム

伊規須 泰子

「交わり」

ベットに寝たつきりの「ふみ」は四ヶ月。近頃少し甘えん坊になつてきました。側に人が居る事を要求します。誰もいないと大声で泣き叫びます。人がお部屋には入つたとたん、ピクリと泣き止み、「ふみ」と声をかけるとニコニコです。だからミルクの時間、おむつを換える時がとつても好きです。保母と交われる時間だからです。こんな小さな子供でも交わりを求めます。ミルクを飲む時は、乳瓶を持つ保母の顔を上げ上げとみつめます。恥かしくなる位に。そして覚えていくのです。

ミルク飲みつつ与うる主をしげしげと

みつむる瞳に、たじろぎの湯く

泣き叫ぶほどの切実さで神様との交わりを求め、神様を知りたいものです。

「幼な子」

ダー君は一年二カ月。陽気な子でくるくる遊び廻ります。保母の足やスカートにしがみついて離れなかつたり、背中を叩いては逃げ叩いては逃げてキャツキャツ喜こんだりします。しかしいたずらがすぎた時、メーとにらむと、笑顔がたちまち真面目な顔へ、更に目を伏せます。もう一声かけるとウーンです。それ

もつかの間、又暴れはじめるとこの子、抱きしめたくなる様な愛情をおぼえます。

○一年とわずか二月すぎし子の

肩より「バー」と、目をのぞき込む

○幼な子の愛らしい姿は限りある保母でもたまらなく  
思います。神様は私共をどんな慈愛のまなざしで見  
守つていらつしやるでしようか。

「信 頼」

「こうじ」が積木を投げました。「マミ」の頭をか  
すめました。

「こうじ」マミに当つたらどうするの！」

保母は「こうじ」の手を掴みピシヤリと叩きました。  
体験を通して危険な事は禁止する。これは良いとして、  
叱つた時の保母の感情は少し激して慌てていました。  
一年九ヶ月の「こうじ」には無理な叱り方でした。い  
けないと言いきかせ、手を叩く、すべて理性で導かね  
ばならない事でした。何故つて他の子供迄騒ぎを一瞬  
止めシーンとしたほど激しい言葉らしかつたのです。  
「こうじ」はベソをつくつていますが何時もの様な甘  
え泣きではありません。

こういう時保母の心はたまらなく悲しくなります。

ごめんなさい「こうじ」と心で詫び、そつと「こうじ」  
の其の後を見守ります。

思わずも叱りて悲しき我なるに

笑みて 寄りくる 幼な子いとし

○子供の信頼はすばらしいものです。叱つても憎しみ  
からではないことを感じています。だからこの信頼  
があるのです。人でさえも まして神様は。いか  
なる時にも信頼したいものです。

「求めよ」

一番嬉しいのはお風です。言う事をきかない子供達  
もこの時ばかりは従順です。

オベントオベントウレチイナ・・・

わからない声を張り上げて歌。イタダキマス。この時  
の静かな事！食べる事に全神経を集中します。さて、  
ここで躰が始まります。この○才から二才十一ヶ月迄  
の子供達に意志を表示させるのです。「お茶ちょうだ  
い」「パンちょうだい」と要求させて与えます。満二  
才すぎたらほとんどの子が要求できます。一才二ヶ月  
の子でも「お茶」「パン」位は言えます。

周囲からこれもいるだろう。あれもいるだろうとい  
う与え方は、子供の発言を伸ばさなくなり意志薄弱な

子、行動力のない子にしてしまおうです。

求めよと 尋ねなさいと ねんごろに

主は語りかけ 交わりを待つ

○人間の躰でさえ要求を一つ一つはつきりさせます。

神様は一つ一つはつきりした折りの求めを待っていて  
らつしやる。そして交わりたいと仰言っているの  
です。

### 「訓練」

一年六ヶ月頃からズボンの脱ぎ着を一人でさせるよ  
うにします。自分の足が自由にならず足先を手でつか  
んでズボンに押し込む姿に度々ぶつかり、涙ぐましい  
可笑しさを覚えます。又便器に一人で用を足す習慣も  
この頃からつけていきます。子供によつては真剣にな  
つてボタンをはずしたり、はめたりして長時間すごし  
ています。保育園は独立心がつくことはたしかです。  
そして生涯の基礎習慣になります。仕事の側からみれ  
ば保母の手でどんだんきかえをさせる方がずつと楽で  
早いのですが。訓練には保母の大いなる忍耐が必要で  
す。子供の将来の事を思えばこそ、あえて行なうこと  
なのです。

全力を尽してボタンかけし子の

悦び充ちし 笑顔美し

○神様が私共を訓練なさる御気持はどんなでしようか。  
はかりしれない慈愛を感じます。どんな訓練をも喜  
こんで受けたいと思えます。それによつて信仰が強  
められます。

### 「祈り」

いたずらばかりしていつも叱られている子  
けんかして泣かしたり、泣かされたりする子

玩具で元気に遊べる子

おしやべりな子

甘えん坊

こんな子は本当は心配いりません。

部屋の隅つこでひつそりと指をくわえている子。や  
つとわずかな積木を得て遊んでいるがすぐ奪われてし  
まう淡な子。大声で泣きも出来ない子。

こんな子は目立たない丈にいつも保母の心にかかっ  
ています。しかし保母の力でどうしてあげることが出  
来るでしようか。神様を知る事が出来る様にただ祈  
ります。

夕暮に

豆腐と白菜それに深葱も、  
少し高価いけれどさや豆の緑もそえて、  
冬を買う夕飼の用意。

勤のかえり

ハンドバックと袋をぶら下げて

野菜屋、お肉屋、果物屋、それに

病の母の為花屋にも

暮れかかる二月の途を小走りに。

忙がしいけど、たのしいのは

やつぱり私は女だからかしらと

こつそり考える。

伊 規 須 泰 子

久住登山の思い出



尼 田 隆 己

私は、三菱セメントの山岳部員です。山岳部員と書くと、いかにも、山のベテランらしく想えますが、山に対しては、経験も浅く知識も無い、ほんの証け出しで、山がやつと好きに成りかけた所です。

私達の山岳部では、一月二九日から三一日迄冬山の訓練として、久住を選びそこで色々と学ぶ事に成りました。

私は冬山は今度が始めてですので、早くから期待致して居ました。新年聖会が終つて、すぐ準備に取り掛りました。この準備期間が大変に楽しく、嬉しいものでした。

父母はとても心配して、不安がつていました。なにしろ夏山と違つて、気象条件の厳しい本式の冬山ですから、無理からぬことでした。最後迄両親の不安を消す事が出来ず、今でも済まなく思つています。私の楽しみみの為、親姉妹をこの様に心配させる権利が、私に



は有るのだろうか？

私は密かに次の事を深く決意して、行かせてもらおう事にした。それはこの登山を通して何物かを得る事と、帰つて来て、大いに親考行をするという事でした。がしかし後者に今だに守られず、相変らず心配ばかり掛けています。

出発前数週間は、身体の事に特別注意を、払わなくてはなりません。登山というものは、登り始めたその時に始まるのではなく、もうその準備中から、始まっているのだと思います。参加部員は十一名で、内女子が一人入っています。出発時の荷は、女子が十五Kg他は二十Kgから二七Kg位でした。私のは二三Kgで背負つて見て、びつくりしました。これだけ背負つてはたして登れるだろうか？。十分もすれば、「ひつくり返える」のではないだろうか。その時はこんなに重いのだから絶対に「ひつくり返えるぞ」という自信？がありました。翌日は実際その通りに成りそうでした。

(六合目から七合目あたりで)

さて出発は、会社の勤務が終つてからでした。あいにくその日は雨でした。雨の中をリュックを背負つて

傘をさして、皆の注目の中を歩くのは、ちよつぴりと得意な気持でした。その日は別府に泊りました。費用の関係上、あまり良い旅館には泊りません。誰かがこれは山小屋ではないか、等と悪口を言っていました。リーダーにYさんという人がいますが、この人が有名な？「いびき」かき、この人よりも早く寝ないと、絶対に徹夜に成るという注意を受けましたので、皆競争で寝てしまいました。お陰で無事にぐつぐつと寝られました。

翌日は上天気、春の様なポカポカと暖い日和です。登山には曇過ぎると思えました。雪山を期待していたのに突に残念でした。

別府から汽車で竹田迄行きまして、そこから又種蒔場迄バスで約一時間、バスでは私達の他は一名しか乗つて居なかつたものですから、十一名で貸切り同様、山の歌を次から次に楽しく歌い、今日の登山に備え、英気を養いました。種蒔場という所は、久住高原の中頃あたりで、牛乳をしぼっています。その日も大きな乳牛が四、五匹、体を洗つてもらっているのが見えました。見渡す限りの牧草地帯で、北九州に育つた私は

こんなに広く明るく輝き渡つた高原を初めて見たものですから、とても美しく印象的でした。祖母山、傾山が遠くにかすんで見えます。阿蘇の噴煙も大きく白く入道雲の様です。この雄大な自然に神様は、私を導いて下さつた。春の様な暖かく、柔らかな光のベールで、この美しい自然を包み、祝福して下さいます。私はこの牧歌的であり雄大な高原風景を、一番良い状態で見たと思います。それで一度ですつかりこの高原の「とりこ」になつてしまいました。今でも眼を閉じると、鮮やかに浮んで来ます。

神様は自然を通して、この様に魂に「うるおい」を与えて下さいます。本来神様が創り給うた自然とは、かくも 人に対して生気を与え、喜びを与えるものだろうか。ここそ本当の「自然」なのだ。今住んでいる所は、あれは何だ。あれでは魂は死んでしまう。生気を失なつてしまうのが当然だ。建て込んだ家々、連立する煙突、舞い上る埃り、自動車の排気のいやな臭い。ここ久住高原には、そんなものはない。人間の手のほとんど無い、この自然、大きく広い美しい自然。神はこの様に魂に必要である自然を与えたもうたのに人間達は、自分達の利益のみを追求し、他人や魂の事等毛頭考えずに、自分達の富のみを、殖そうと追い求

めた結果、神が与え給うた自然とは似ても似つかぬ、とんでもなく不自然な市や町を作つてしまつたのではないだろうか。そうは言ふもののこの北九州の地にも感謝すべき事には、神様は慰めの多い山や海を与えていて下さる。ことに夜等星空は魂に平安を与えてくれます。今日迄これらの物にどれ位慰められて来た事でしょう。でも久住のそれとはスケールが大違いです。私は山々にかこまれた雄大で美しいこの地で永久に暮らしたく成つた。



冬の久住を期待していたのに、実際には、春の山の様に暖かく、リュツクの荷だけが、重く肩に食い込んで来る。種蒔場から私達は、二組に分かれA班が六名B班が私を含む五名、A班は展望台を経て、御池、頂上へ私達B班は、南登山口から七曲り、明神水、を経て、頂上へと、しばらくの間、別れ別れに成りました。色々な事を考えながら、この美しい、気持の良い草

原を汗を流しながら歩いていく。この草原を歩くこと一時間三十分余り、やつと山道に入つたのです。南登山口にて弁当。久住の頂上には、白い雲が、かかつては消えかかつては消えしている。その様子に自然時に天候の厳しさの一面を見せられている様で心が引き締まつた。こちらあたりで海拔八百八〇米位です。あと九百米位で頂上ですが、さすがに登りが急です。

青く澄んだ空を見、地面にとらめつこを、しながらエツチラコ、エツチラコ、と登つて行きます。ひどく汗が流れます。今日はやはり、天氣が良過ぎました。もう六合目から、七合目附近です。はるか南西の方向に、雲仙岳が横に走つた雲海の上から二つチヨコンと頭を出しています。あの山にも登つた事が有り懐かしく思い出しました。こうして遠くにあつて眺めるのもまた良いものです。

六合目附近から、息が上つて、頂上には着けそうに有りませんでした。もうだめだ、もうだめだ、思いながら普通の歩巾の三分の一位の歩みしか出来ませんが少しづつ登つて行きます。登りが急で皆も苦しそうです。土を踏むと、白い「湯気」の様なものが、上つて、まるで土が息をしているみたいです。あたりに

は丈の小さな木に、霧氷がついていて、とても美しかった。私達は汗が出て苦しいので、手当り次第にそれを取つて口に入れました。足が重たく上らない。十cm位ずつしか進んでなかつた様に、思われます。一cmでも進んでおれば、必ず頂上に着く、止つたり退いたりするとだめだ。あまりの苦しさに後を向いて帰えろうかと、何度思つた事でしょう。でもやはり、前進だ、前進あるのみです。私はこの苦しい時に信仰について考えていました。信仰生活も大きく進める時もあるがこの様に試験の重荷を背負つて、苦しく進みにくい事もある。その様な時決してその試験に背を向けて逃げ出してしまつてはいけません。今の私の様に百八十度一回転して後を向けば、易しい楽な下り道が、開けて来るのだが、そうすると神に近づく事は出来ず、ますます離れて行くばかりです。もし前に進めなくなつたら、前に進もうとする願いだけでも持たなくてはいけない。それでもだめで倒れるなら後に倒れるのではなく前に倒れたいと思う。そうするには一足一足に祈りを、重ねて祈り深い生活をしなければならぬ。神様は必ず力を与えて下さる。本当に自分の弱さを知つて祈る祈りには神様は喜んで答えて下さいます。

青い空、やわらかな光、広い高原、霧氷のついた木

等は私を力強く、励ましてくれた。まわりの雄大な自然を見ると、神様がやさしく、暖く見守っていて下さる様で元気が出てきて八合目あたりから、馬力が出て来た。それから霧氷の中を、上へ上へと頂上迄、信じられない元気で登ることができた。七合目あたりから、硫黄の臭がしていましたが（今日の風は硫黄山方から吹いていまして）頂上に着くと、硫黄山の煙がこちらに、なびいて一風強く鼻をさします。さすがに頂上はすばらしい。一七八五。八米、視界を断つものは何もなく、雲も少なくとても視界がきれい。この絶景を皆さん方にも味わってもらいたいものです。

でも風はやはり冷たく、さわやかです。

詩篇六六篇一節二節「全地よ、神に向つて喜び呼ばわれ、そのみ名の栄光を歌え、栄えあるさんびを、さげよ。」同百八篇、一節から六節まで、

「神よ、わが心は定まりました。わが心は、定まりました。私は歌いかつほめたたえます。わが魂よ、さめよ。」

この登山を始めから終りまで無事に導き守つて下さった神様に栄光を帰しつきない感謝を献げつつ筆を置

きます。



正野真宏

「えつ／＼ 何ですつて この私が日曜学校（OS）の先生に……？御冗談でしょう。私みたいなものが

。」「ある日の礼拝后帰る時になつて、榎本先生からOS三級（中学生男子）を加勢するよう当分に伊規須先生の話しを聞くだけでよいからと冒われてびっくり驚天「これはえらいことになつたぞ。」私は頭をかゝえ込んで家へ帰えつた。

当分は伊規須先生の補助であつても、いづれは説教しなくてはならなくなるだろう。

とても説教なんか出来たもんじゃない。

私は生まれつき話しをするということが大の苦手、口を開けば恥をかくので自然言わざるとなる。母の胎を出した時も「オギャ／＼」と言つたかどうかそれも疑わしいと思つているくらいだ。小さい時の記憶は余りないが、幼稚園でよく泣いたそりだ。私はそんなことは

ないぞと頑張るのだけれど、家の者はあゝゆうこともあつた、こうゆうこともあつたと例を上げて来る。そうなると思えざるを得ないのである。とに角無口で小心者であつたことだけは間違ひはない。学校へ上つてもあまり手を上げるといふことをしなかつた。うまく説明できないからだ。今だに課長あて会議報告する時も、前もつて準備しておかないと話があつちへ行つたりこつちへ行つたり突にジャジャ馬である。相当に優秀な聞き手でないとついでゆけない「君は一体何を言つているんだ」最後にこう言われる。こんな私だ。とてもOS生徒に話しをする自信がなかつた。それに自分の信仰がまだ浅く人様に教えるような代物ではない。しかも神様に対する愛もなければ熱心もない。正にないないづくしではないか。ないないづくしの先生は生徒につまづきを与えるばかりだ。

私は教師となつた自分を想像してみても恐くなつた。まるで何をしてよいかわからないまま、で舞台上に押し出された感じ、一齋にみんなの目があつまつて私は頭をかきながらモジモジするばかりである。そんな自分を想像すると尻ごみしたくなる。自分の性分としては舞台上に立つよりも観客の一人として見ていた方がよ

いな、人様の前に立つての御用よりも陰でひっそり信仰し、もし出来得るものなれば目立たない舞台裏での御用の方が性に合つていと考へた。私は辞退したかつた。今しばらくもう少し信仰ができるまで持つて下さいと牧師先生の所へ行きたかつたのである。けれども祈つているとそうすることは主の手を押しつけることになるような気がして来る。神様の御命令だつたらどうする。けれども自分はしたくないしはらく迷ひ決心しかねていた。

丁度その頃エレミヤ哀歌を読んでいたら「主の救いを静かに待ち望むことは良いことである。人が若い時にくびきを負うことは良いことである。主がこれを負わせられる時、ひとり座つて黙して居るがよい。」(三・二六以下)という御言を見出し出した。これを説いた時、主が直接私に語りかけられたように感ぜられそれまで迷つていた私は観念した。OS教師になることは「主がこれを負わせられる」ことである。そして主が負わせられる時はさからわずに「ひとり座つて黙して居る」ことが最上策であることがわかつたからである。

「口をちりにつけよ、あるいはなぞお望みがあるであ

ろう。おのれを撃つ者にはほお向け満ち足りるまでに恥かしめを受けよ。主はとこしえにこのような人を捨てられないからである。」(二九ノ三一節)

成程失敗もあるう。あるいは人から笑われることもあるかもしれぬ。その時はあまんじて受けたらよろしい。とにかく神様の取り扱われるまゝに身を任せたらよい。右に転がされたら右に転がればよいし、教師になれと言われればなつたらよろしい。お前なんかつまらんからやめろと言われれば喜んで(?)やめたらよい。私はこゝを読んでそのように理解した。それで素直にお引き受けることに心決めたのである。

それからしばらく伊規須先生のクラスに出席させてもらっていた。お話を聞いてお祈りをするだけであるから気が楽であつた。平穏な数ヶ月が経過したが、ある時伊規須先生が遅れますから御用して下さいと頼まれたのである。昔の人は言いました。天災は忘れた頃にやつて来る。さあ大変だ、先生に代つて説教せねばならない、それも三十分も。今だかつてそんな長話しをしたことがないぞ、牧師先生は一つのテーマで一時間でも二時間でも話されるが、よくもあんなに次々と話しが出て来るもんだなと私は感心しているのであ

る。私はチヨコチヨコ話してすぐ種切れ、せいせい五分くらいで終るのではなからうかそれをいかにして十分に引き伸すかが問題である。その一週間というものの寝てもさめても説教のことが頭から離れなかつた。とにかく静まつて準備した。ころゆうことが話したいなということを思いつき、その御言葉を探し出すと次々と我ながら感心するような名説教が浮んで来たではないか。私はうれしくなつて、これでめこうとできるだけそれを憶えた。そして当日になり、生徒の前に第一声を発すると、緊張した声が自分の耳に伝わる。今日は声を変だなと思つたらもう次の瞬間何から話すのだつたか忘れてしまつた。昨夜の名説教は何処へ行つた。頭の中から消えてしまつて出て来ない。私は慌てた。先徒がげげんな顔をして私を見る。私に混乱する頭の中にわずかに残っている落穂のような言葉を捨てる。ポツリポツリとまるで山羊か兎のクソのよう

に連がりのないあわれな迷説教であつた。

私は失望した。やつぱり駄目なんだ、説教なんか出来つこないんだ、ア！この世に言いたいもののがなかりせばこんな苦勞もあるまいになんて考える始末

それからCSに出ていても何んとか止める方法はな  
いものか、神様はやめると仰言つてくれないものだろ  
うか、そんなことを期待したりした。ところが私の期  
待とは逆に伊規須先生が高校クラスを持つことになり、  
私に三級を任されたのである。あゝ無情／毎週説教し  
なくてはならない。

私は真剣にならざるを得なかつた。

「あゝ主よ、わたしは以前にもまたあなたがいしもべに  
語られてから後も、言葉の人ではありません。わたし  
は口も重く、舌も重いのです。」（出エジプト四・

一〇）「ああ主なる神よ、わたしはただ若者にすぎ  
ず、どのように語つてよいかわかりません。」

（エレミヤ一・六）ありのままを訴え祈つた。祈つて  
いると、神様が導かれるように思えて心が安まる。け  
けどもしばらくすると、また不安がくる。また祈る。  
何日かその繰り返しだつた。

ある時何気なく「わたしたちはこの宝を土の中に持  
つている」（コリント②四・七）という御言葉を思い  
出した。土の器とは私のことだが、私が宝をもつ  
ている？ はて？ と考えていると、宝とは神を恐  
れる知恵のことではないだろうかと思ひ当つた。

その時ひらめいたのは「君は知恵を持つてゐるでは  
ないか。君はこんなちつぽけな信仰というけれども、  
そのちつぽけなものによつてどんなに支えられている  
か考えてごらん。現に君は神を恐れて世と同調せずに  
歩んでいる。神を知り真理を知つたからだ。しかもこ  
れは君自身が努力して悟つたものではなく「血肉これ  
を表わすにあらず、天にいますわが父なり。」

（マタイ一六・一七）神様が君の心を開いて与えられ  
たものではないか。

世の人はこれを得ようとしても得ることばできな  
い。だのに君はタダで受けたのだ。たとい小さなもの28  
であつても君が持つてゐるものは神の賜物であつて貴  
いものである。これを卑下してはならない。むしろ生  
かすべきだ。悪い怠慢な僕はタラントを土の中にかく  
してこれを生かさなかつた。与えられた知恵をじつと  
自分の中にしまろ込んでおくのはいけないことだ。  
知恵が君に力となつたと同様に生徒にも力となるもの  
である。」

それまで無いはずで無いものばかり数えあげ  
この故に駄目でございます資格がございませんと神様  
の処へ何回となく交渉に行つた私は懇々と諭され

「それでも君は辞退するか」と神様に迫られて「いや」とは言えなくなつた。

ペテロとヨハネは美しの門の前に座つて物乞いしている乞食に「金銀はわたしにはない。しかしわたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によつて歩きなさい。」（使徒行伝三・六）といつた。ペテロとヨハネは自分達の持つてゐるものが金銀よりも尊く素晴らしいものであることを知つていた。そしてそれを伝えた。私も神様から示されて見直した訳だ。美しの門の乞食は「キリストの名によりて立ちて歩め」と言われた時、なえた足がシャンと立つた。これはペテロ、ヨハネ自身にその力があつたからではない。キリストの名に力があつた。

同じように私には教師としての指導力も説得力もない。だが神の言に力がある。これによつて生徒は立つて歩むようになるにちがいない。私の力ではなく、神御自身が立たせて下さるのにちがいない。それまで私は謂ゆる名説教をしなければと四苦八苦していたのであるが私のなすべきことはあるものを伝えることであつて、何も無い力をしほり出すことはないのだ。それは手品師しかできないことである。私にそのように考

えた。そう考えるとずつと気が楽になり「これなら私にでも出来そうだ。」と希望が湧いて来た。

だから私はやめさせて下さいと祈つた祈りを取り下げ、改めてよろしくお願いしますと祈り直したのである。

それから今年で二年になる。光陰矢のごとしとはよく言つたもの、もうそんなに経つたのかと驚いている。その間何回となく失敗し、また重荷になつたり主から離れたり、まるでヨチヨチ歩きの子供が何時つまづき倒れるかわからない様で歩いてゐるが如き私であつたけれども、主は「傷ついた莖を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもつて道をしめす」（イザヤ四二・三）そうゆう私を導いて下さつたことを感謝する。

数数年前ヘレンケラーを描いた「奇跡の人」という映画を見たが、あの映画で少女ヘレンはずいぶんサリバン女史を手こずらせた。言うことを聞くどころかことごとく反抗する、逃げまわる、わがまゝに育てられたヘレンにとつて教育はいやなクビキであつたにちがいない。そういうヘレンに対し突に大きな愛と忍耐をもつて教育しヘレンを今日ならしめたサリバン女史に



我々は深い感動を覚えたのである。今考えるに私は神様の前にサリパンから逃げまわるヘレンケラーみたいなものではなかつただろうか。初めはOS教師はいやだいやだと逃げまわり、なつた後も、重荷になつたり自分の力自分の考えでやろうとしたりいろいろと神様を手こずらせたにちがいない。そういう扱いにくい者を捨て給わず大きな忍耐をもつて教え導いて下さつた神様の真実さに深く感謝する。靈的に盲目であつた私も少しづつ御意を知るようになり、OSについてもただ話すことだけであつたけれども彼らが弟のように感ぜられて主に従う者となるようにと祈るようになった。

先日西原先生からカードをいたゞき大いに希望と喜びを与えられた。それには「多くの人を正しきに導ける者は星の如くになりてとこしえに輝かん」(ダニエル十二・三)とあつた。神の前に星の如く輝やくという何たる光栄私は人を導くとかそんな大それた者ではない、あいかわらず話べたの落第教師であるが主のあわれみにより神の御用の端くれにでも加えていたゞいたことを「私はよい嗣業を得た」(詩十六・六)と喜ぶのである。



編 集 後 記

何分にも初めてのこと故、どのようにしたらよいかわからずにおりましたが、皆様の祈りに支えられてここにこうして会誌「ぶどうの木」第一号を発行することができたことは本当に感謝です。皆様の御協力に御礼申し上げます。

会誌発行の呼びかけに市立八幡病院に入院中の松村兄より三編投稿をいただきましたがまさかこれが兄の遺稿になるうとは思つてもみないことでした。憐みに富み給う主は、こうゆう処まで御心を配つて兄のために備えて下さつたと思います。

「彼は死んだが信仰によつて今もなお語っている。」

(へブル十一・四)もはや私達は松村兄を見ることはできませんが、残された証しを通してしのぶことができますとは何んとうれしいことでしょう。

初めサフラン会で出した小冊子が発展して教会誌となつたのですが、すべては神様の導きであつたと思ひ大いに力を得ました。

農夫である神様はこの「ぶどうの木」を養い育て多くの実を結ばせて下さるにちがいありません。

引き続き二号三号と続けたいと願つておりますので、生活の中の出来事などどんな小さなことでも結構です。主にある兄弟姉妹の茶の間の団らんというような気軽な気持でペンを執つて下さい。そして皆さんが交りに加わつていたゞけるよう祈つていきます。

昭和四十年四月二十三日

昭和40年5月10日 印刷  
昭和40年5月12日 発行  
発行 八幡前田教会  
編集 正野真宏 尼田隆己  
西原文江

印刷所 有限会社 よしみ孔版社